説教20210509使徒11:19-30 ヨハネ15:9-17

「神の愛にとどまっていると」 546 21-544 431

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の使徒言行録の箇所は、私達がクリスチャンと呼ばれるようになった時のことが記されている重要な箇所です。クリスチャンというのは日本人とか中国人とかいった区別を乗り越えられる、神の国の住人、神の民のことです。

私事で恐縮ですが、私が神学校で学んでいた時、有志の旅行団を結成してタイのカレン族の教会を訪問したことがあります。礼拝の後に、教会の代表者が「私たちはカレン族のクリスチャンです」と挨拶されたので、それに答えて「私達は日本人のクリスチャンです」とカレン語で挨拶したら、会堂が何とも言えないほっこりした雰囲気に包まれ、笑いが漏れていたことを思い出します。これはカレン族、日本人といった区分を超えて、クリスチャンが存在することの証だと思います。

キリストを信じる者たちが、一言でクリスチャン、と呼ばれるようになったことは大変画期的な出来事であったと思います。今日は、私達にクリスチャンという呼び名が与えられていることに感謝しつつ、共にその時のことを聖書に聞いてまいりましょう。

さて、私達がなぜこの時、クリスチャンと呼ばれるようになったのか、その理由を知るには、使徒言行録11章19節に出てきます「ステファノの事件」について知っておかなければなりません。それは7章「ステファノの殉教」に記されています。彼はユダヤ人で、旧約の律法を守って生きてきた人物でしたが、時が来てイエスキリストを救い主と信じ、それを広言したので、ユダヤ人から石打の刑にされて、殉教者の第一番目となったのでした。7章60節「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」というステファノの最後の叫びを聞きますと、あたかも彼の殉教の姿は、十字架上のイエスキリストを彷彿とさせます。

　彼はパウロと同様、ユダヤ人の伝統に従って生きてきた人でした。ユダヤ人であることの証というのは、属する一族が割礼を受けている一族かどうかという事です。その家の家長が割礼を受けていれば、その一族はユダヤ人社会の中に受け入れられ、割礼を受けていなければユダヤ人社会の一員ではないのです。ですから割礼を受けているかいないかという事はユダヤ人社会で生きようとする者にとって、生死を分かつ重大事であるのです。このことは私達にはなかなか理解できないことですので、特に心して覚えておいて頂きたいと思います。

さて、割礼というのは体に刻みつけられるユダヤ人としてのしるしであります。ところが、ステファノはイエスキリストを信じないユダヤ人たちに対して、「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。」というように彼らのことを「心と耳に割礼を受けていない人たち」と言っています。耳に割礼を受けないというのは聞く耳を持たないといったニュアンスでしょうが、つまり心と耳に割礼を受けないというのは、目に見える肉体に刻まれたしるしとしての割礼を言っているのではなく、心がかたくなで、聞く耳を持たないといった、物体ではない態度のことを言っているのです。

このステファノの発言は、ユダヤ人たちを激しく怒らせたのではないでしょうか。ユダヤ人たちは体に割礼を受けていることに誇りをもち、それで自分たちは神から認められて生きているのだという選民意識をも持っていることでしょう。それなのにこのステファノという人物は、あなた方の受けているそんな割礼は、神の前に価値がないと言っているかのようです。ちゃんと心と耳に割礼を受けないと意味ないですよ、と言っているかのようです。つまり、ステファノはここで、ユダヤ人たちが体に受ける割礼という儀式は無価値であると広言したのです。このことは、今の日本で、天皇制が無価値であると国会で広言するのと同じ位危険なことでありましょう。

では、ステファノが言った「心と耳に受ける割礼」というのは、ステファノの作りごとかといえば、全くそうではなくて、ちゃんとそれは聖書に預言されているのです。レビ記26章41節やエレミヤ書6章１０節などに「心と耳に受ける割礼」という事は記されております。つまり、主なる神は、肉体に受ける割礼に代わる、まことの救いに至る割礼、すなわち「心と耳に受ける割礼」のことを最初から示しておられたのです。

さてステファノの殉教の事件をきっかけに、エルサレムにいたキリストを信じる者たちは四方八方へと散らされます。そして、アンティオキアという街まで行ったとありますが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった、と言います。アンティオキアはローマ帝国第三の大都会で、遊興施設や、異教の大神殿などもあって、様々な民族が集まってくる国際都市でした。ちょっと別府という街に似ているかも知れません。アンティオキアではひょっとするとユダヤ人は少数者であったかも知れません。使われる言語もギリシャ語が多数であったことでしょう。そうすると、この時アンティオキアにやってきたユダヤ人は、少数のユダヤ人の集まるところだけを目指してキリストの御言葉を語っていったという事でしょう。しかし、例外的にキプロス島やキレネから来たユダヤ人たちは、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせたというのです。それは何故かと言いますと、キプロス島やキレネなどの地方はローマ帝国内に在り、日常語がギリシャ語であって、彼らはギリシャ語がペラペラでしたので、自ずと、ユダヤ人以外の民族と、ギリシャ語を使ってコミュニケーションをしたからです。

ここで私達は、人間の意志を越えた主なる神の計らいを知るでしょう。キリストを宣べ伝える大半のユダヤ人たちは、ヘブライ語を使って、仲間であるユダヤ人たちに、まことの福音、すなわち体に受ける割礼ではなく、心と耳に受ける割礼のことをステファノのように熱心に説明していたのでしたが、これら例外者はギリシャ語を使って、ユダヤ人以外の異邦人たちとコミュニケートして、結果的に、キリストの福音が告げ知らせられたのだと思われます。これらギリシャ語を話す例外者たちは、ステファノのように力んでは伝道していなかったのでありましょう。ただ聖霊の導きに身を任せ、気が付いたらキリストの福音が伝わっていたというような成り行きが思われます。ここら辺は、先週のフィリポが宦官に馬車の中で福音を宣べ伝えた場面も髣髴とさせますが、このようにして、信じて主に立ち帰った者の数は多かったので、このことがうわさになってエルサレムにある教会にも聞こえてきたというのです。だいたい、人々が喜んで噂にする出来事というのは、良くも悪くも人間業でない驚くべきことでありますが、この時の噂話というのは、「私達の救い主イエスキリストのことが、アンティオキアの街で、関係がないギリシャ人たちにも何故か続々と伝わっているぞ、」という驚きを込めたものであったことでしょう。

ここで敢えて関係がないギリシャ人と申しましたが、実にユダヤ人たちからすれば、この時イエスキリストの救いは、ギリシャ人には関係のないことと、思っていたのではないでしょうか。あくまでユダヤ人たちは、イエスキリストの救いは、ユダヤ人だけにまことの割礼、まことの救いをもたらす者として認識していたように思います。

ですから、あれよあれよという間に、その関係がないギリシャ人たちにもキリストの福音が宣べ伝えられていくことにユダヤ人たちは驚き、そして、その成り行きを大いに喜んだのです。

冒頭で、クリスチャンという呼び名は、日本人とか中国人とかいった区別を乗り越えられる、と申しましたが、この時、アンティオキアでギリシャ人という異邦人にも福音が伝わったので、人種を越えた、私達キリストを救い主と信じる者たちに対する、呼び名が必要とされるようになりました。そうしてこのアンティオキアで、キリストの弟子たちが初めてキリスト者、クリスチャンと呼ばれるようになったのです。

ここまで成り行きで、ギリシャ人にも福音が知らされ、伝道の業が大いに進展した様子が分かりましたが、この伝道にはバルナバ、そして9年間故郷タルソスで引きこもっていたパウロも担ぎ出されて、彼らは大いに伝道に貢献したのであります。しかし私達はこれらの人物の貢献という事の前に、その源にある主なる神の御業の、すごさや不思議さに、驚かされ又喜ばされることでしょう。

　キリストを信じるユダヤ人たちはアンティオキアの街で必死で、ユダヤ人たちの集まる場所を探して、その狭い場所だけに限って伝道をしました。ここに設けられた限界というのは、ユダヤ人たちが割礼といった古くからの慣習に従順であった故に自ずと設けられた自らの限界です。一方で、ギリシャ人たちは割礼といった慣習とは無関係でしたので、ユダヤ人たちとは別の仕方で、キリストの福音を受け入れることができたのでありましょう。その仕方というのは全く人間が意図することが出来ない、聖霊の導きと言うほかない仕方であったことでしょう。

翻って今の日本に目を向けてみましょう。今日の聖書箇所ではアンティオキアという異民族が交差する街で、キリストの福音が、一民族の縛りや思惑を越えた、主なる神のご計画によって、広まっていった様子を見てきました。今の日本でもキリストの福音が伝えられてから何百年という歳月が流れましたが、まだまだクリスチャンという存在が明確ではないようです。例えば街角で「私は日本人のクリスチャンです」と名乗っても、あまり意味が通じることはないでしょう。

本来、クリスチャンという存在は、人種を越えて拡がっていくものです。そしてそのよりどころとなるのは、今日の説教題にしました「神の愛に留まっている」という事であります。神の愛という一つところにじっとして留まっている、という事は、異民族が交差する華々しい国際都市での活発な生活ということと、一見対局にあるようですが、実はそうではありません。

タルソスに9年間留まっていたパウロは、バルナバから呼び出されたとき、待ってましたとばかり功名心に燃えたでしょうか。それは日本史に出て来る武将などによく見られる話ですが、私はパウロはそんなことはなかったのではないかと思います。ただ、次の新たな生活の場として、パウロは粛々として、バルナバと共にアンティオキアへと赴いたことでしょう。このように、神の愛に留まっていることはいつどこにあっても私達クリスチャンの基本であります。どうか私達がその基本を忘れず、この一週間も主イエス・キリストに守られて過ごしていきたいと願います。

祈ります

天の父

全能の神よ、どうか私たちの寄る辺ない不安な心を静めてください。一人静かに祈るひと時の平安をお与えください。そして、必要ならば、私たちをあなたの御用の為にお用い下さい。

主よどうか、今猛威を振るっております新型コロナウィルスを治めてください。私たちは新型ウィルスとの戦いの中で、あなたから祝福され守られていますことに感謝いたします。どうか、あなたから私たちを引き離そうとするすべての敵から私たちをお救い下さい。

どうか、祈りの内にあなたと対話することができる心と思いを私たちにお与えください。そして、今、この世で様々なお仕事に従事されている方々、ことに病院で働く方々、施設や学校で働く方々を覚えて、私たちがとりなしの祈りをしていくことができるようにして下さい。

　今、教会に来られずご自宅で祈りをささげられておられる方々を覚えます。どうかその兄弟姉妹一人一人にあなたが近く居まして、必要な御言葉をお与えください。私たちがどこにいましても、共にあなたに向けて賛美の歌声を歌っていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって